

開催地 : 長
 播種日 : 20
 定植日 : -
 審査日 : 20
 特長
 「白老早生」
 ~5月播種は
 広く、見栄え
 緑色で色抜い
 「白老早生」
 い。株張りよ
 枯れ上がりは
 ▽問い合わせ
 ※「pick up 優良

養分補給も行われなかつた。そのため土壌肥沃度の低下と土壌侵食の進行に伴い、紀元1400年頃には都市国家も農地も放棄されてしまった。

北部から移動してきたアステカ人が紀元1325年頃メキシコ盆地に定住し、その後テノクチトランを首都として新しい国家を建設した。この国家における農業生産は湖や湿地に浮島を作り、トウモロコシ、豆、アマランス、市場向けの野菜などを栽培した。

この方法はチナンパ農業と呼ばれ、肥沃度の低下を伴わない持続的な農業形態であり、約120km²で10万人の食料を供給することができた。しかしこの文明はスペインの侵略により1521年に滅ぼされてしまった。

南米ペルーでは5000年前から3500年前に建設された沿岸部のカラル遺跡を皮切りに、海岸部と高地に次々にさまざまな文明が栄えてきた。標高3800mのチチカカ湖の周辺に住む人たちはリヤマやアルパカなどアンデス特産の家畜を飼い、ジャガイモやキヌアなどを栽培し、さらに15日から20日をかけて山を下り海岸地帯に移動し、寒い高地ではできないトウガラシやトウモロコシなどを栽培していた。

アンデスのグアノ

作物の肥料は、家畜の糞や沿岸の島で採れる海鳥の糞の化石グアノを利

用した(古代アンデス文明を築しよう―特別展 古代アンデス文明展 オフィシャルガイドブック 2010)。彼らは土壌肥沃度を間作、マメ科植物を含む輪作、休耕、堆肥と灰の利用によって維持した。

地域に密着した土壌分類システムを持ち、種まきの前に土を耕さず、極力土をかき回さないようにしていた(デイビッド・モントゴメリー「土の文明史」築地書館 2010)。最終的にアンデス文明を支配したインカ帝国は1533年にスペインによって滅ぼされた。

水草が農耕地の肥料

本連載17回目でアンデス川中流から下流域にテラプレタという人工的に炭を加えて作られた農地で永続的な農業が行われていたことを紹介した。これに加えて、アマゾン川の源流部の一つであるポリビアのモホス大平原でも紀元前2000年頃から高度な農耕文明が栄えていた(実松克義「アマゾン文明の研究」現代書館 2010)。

モホス大平原は盆地状の地形のため、アンデス山脈の雪融け水を集め1年の半分は巨大な浅い湖となってしまう。そこに古代人は土を盛り上げた島状の農耕地と居住地を作り、それらを結ぶ直線的な道路兼堤防を構築した。堤防沿いには運河や貯水池も作り水を管理した。農耕地の肥料に水草

などを用いるなど、環境調和的なものであった。

テラプレタとモホス大平原での人工農地は多くの栽培作物(キャッサバ、カボチャ類、インゲン豆、落花生などの豆類、グアバ、パイナップル、タバコ、綿等)の原産地となった。トウモロコシやバレイショもアマゾンにあった原種をアンデス高地人が移植、品種改良した可能性がある(実松克義、同上)。

地球半周して出会う

栽培植物のなかにはアンデス高地を起源地とされているものも多いが、アマゾン川流域の方が土壌も肥沃で気温も高く、多様な栽培植物の起源地として適している。またアンデス高地との人と物の交流も大河とその支流を通じて容易に行われたと考えられる。これらのアマゾン農業文明もスペイン人の征服および侵略者によってもたらされた疫病の蔓延によって滅ぼされてしまった。

ホモサピエンスがアフリカを出たあと、西に進んだ文明は一貫して土地収奪的なものであった。これに対し、東に進みベリリング海峡を渡り最終的に南アメリカまで移動した人々の農業は環境調和的でエコロジカルなものであった。

両文明が地球を半周して出会うことによりエコロジカルな文明を守ってきた人々とその知恵と伝統文化が滅ぼされ彼らが残した自然と土地の遺産までもが大規模開発によって破壊されていることは悲惨なことである。